慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	社会科学 : 不完全なアート 日本近代化 : 事例研究
Sub Title	Daniel Bell "Social science : an imperfect art the modernization of Japan : a case study"
Author	Bell, Daniel(Kobayashi, Paul) 小林, ポオル(Oda, Teruya) 織田, 輝哉
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1995
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.41 (1995.) ,p.2- 5
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	記念講演
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069 57X-00000041-0002

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

社会科学——不完全なアート
日本の近代化：事例研究

ダニエル・ベル

小林ポオル，織田輝哉訳

1　1979年に慶應で開催された国際シンポジウムにおいて私が取り上げた問題は，マックス・ウエーバー（それより前にはマルクス）によって言及されたものだが，社会学理論が取り組むべき未解決の問題は，資本主義がなぜ西欧で発展して東洋では発展しなかったのか，ということであった。ここでマックス・ウエーバーが東洋ということばで示したのはまず第一に中国であって，日本ではなかった。彼が指摘しているとおり，中国は巨大な版図を持ち，広範な商人層が既に形成されており，また，少なくともエリート階層については読み書きと勉学の必要性が重視されていたが，それでもなお資本主義は発展しなかった。その理由について彼は著書「中国の宗教」のなかで，儒教の倫理が階級秩序を重視し，経済活動を蔑視したからであると書いている。

資本主義（この概念は，多くの社会にふつうに見られる利益追求や富の獲得以上のことを意味するが）は，以下の2つの理由により西欧社会で発展した。

1　西欧において，ギリシャ哲学・科学に起源を持つある特殊なタイプの「合理性」——効用理論の基礎となった手段—目的の関連づけおよび計算法——が発達していたこと

2　宗教が経済活動に徴用されたこと：プロテスタンティズムの倫理は労働をすべての人にとっての召命，修養として重視したこと

しかし，1970年代以降に生起した問題は，なぜ日本で——そして現在では東アジアのかなりの部分で——資本主義がこんなにもうまく発展したか，ということである。私が述べてきたことは，もし社会学理論に手がかりを求めるならば，それはウエーバーよりむしろデュルケームの社会的連帯に関する考察に求めるべきだ，ということであった。私はここで再びこの疑問点に立ち戻った上で，社会学理論の方法論的検証を行いたいと思う。社会学理論は，普遍的なテーマでなく過去の具体的事象を扱う歴史学以上のものでなければならない。社会学理論は，「包括的な法則」ではないにせよ，われわれが社会現象の説明を引き出すことが出来るような一般化された体系を持つもの，または，持つべきものである。

ここで，私の意見を図式的にまとめておきたいと思う。

2　近代社会理論はコントの進歩的発展段階の理論とともに始まった。これは，神学的，形而上学的，実証的（科学的）発展段階である。コントはこれを，サン＝シモンの軍事社会から産業社会への変動の素描から導いた。この枠組みは，後にハーバート・スペンサーやレイモン・アロンによっても用いられた。

3　より大きな哲学的枠組みは，ヘーゲルによって与えられた。彼は，歴史発展の原動力として絶対精神の自己展開を用いた。彼はそれを最終的には必然性の拘束を終わらせ，すべての二項対立（例えば精神と物質，自然と歴史，主体と客体）を克服し，「歴史の終焉」となる普遍主義として規定した。理性の発展の図式から見ると，インドをはじめアジア各国は「凍りついた」社会であって，専制政治の下で合理性を発展させることができなかったのである。

4　マルクスはヘーゲルの抽象的範疇を「現実化」し，社会的位置づけを与えた：二項対立は，持つ者と持たざる者，精神的労働と肉体的労働の分業，都市と農村の分裂等々に，翻案された。歴史を進める原動力は理性ではなくその実体的概念である技術（Techne）になり，必然性は克服され豊かな「自由の王国」としての共産主義社会が歴史の終着点になる。

マルクスのこのまばゆいばかりの図式は，ユートピア的未来像を描くためだけでなく，社会学的方法論のためにも構築されているのである。マルクスは，社会の共時的見方（構造）と継時的見方（社会変動）とを結合させた，下部構造たる経済様式に基づく単一図式を提出したのだ。このマルクスのもの以外に，このよ

うな単一の結合を与える理論は他にはない。

その方法論的困難：マルクスの図式に現れる諸概念は，社会の構成要素ではないということ，つまり，記述している当の現象のなかに本質的に存在するものではない，ということである。この図式は社会に当ててそれを分類するための，いくつかのカテゴリからなる概念的プリズムであって，例えば，社会の支配様式の変遷を記述するための，家父長的・家産的・合理合法的権力というウェーバーの権力の概念図式とも同様の機能を有するものである。

理論というものは，真であるか偽であるかのどちらかである。概念図式は有用か役立たずかのどちらかである。あえて言えば，マルクスの図式は1750年から1950年までの西欧社会を理解するための最良の図式であろう。しかしそれは，社会の一般理論でも，歴史の一般理論でもないのである。

マルクスに追随して，社会学的理論も「概念図式」へと向かった。産業化という歴史的事実に依拠しているが，めざすところは無歴史的あるいは「一般的」概念図式である。すなわち，テンニースのゲマインシャフトとゲゼルシャフト，デュルケームの機械的連帯と有機的連帯，ウェーバーの伝統社会と合理社会などはこの例である。しかし問題は，このような図式がはたして社会連関のすべてを網羅する包括的なものなのか，どれくらい有用なのか，ということである。

5　社会科学のモデルとしての新古典派経済学。ガリレオに始まる古典力学の派生物としての経済理論。現実の事物から，閉じた領域内での対象の「属性」へのシフト。微積分可能にするために内実（資本と労働）を均質化して用い，一定の生産関数の下で相対的コストと効率的利用の推定を可能にする第三次言語としての経済学。基盤は，すべての市場を統合する一般均衡である。経済理論の弱点は，それ自体が現実の制度から逸脱してしまうことである。「経済」と「経済学」の区別。経済人の行動は安定しており，選択は常に合理的になされるという仮説（計量経済モデルとラグ変数の問題；現在の事態に対する「政治的割引率」と「経済的割引率」。「信頼」の果たしている役割）。

6　社会学的な「閉システムモデル」。パレートとパーソンズ。パーソンズは社会関係と社会システムに関する普遍的な分類体系を樹立したが，その高度に抽象化された中心概念を，現実社会に適用してしまうことの問題。古典力学や経済学とは異なり，社会学には計量的概念が欠如している。例えば，富，権力，社会的地位の間で，それぞれの尺度値を他の尺度に変換するのに，どのように転換率を設定すれば扱えるのか。

7　多くの社会学の図式が，社会が全体的に統合されていることと，その統一を保った様式ないし時代が全体として変遷する，という社会変動の理論を当然のものとしている。つまり社会変動は，明確に区分され，その中では有機的統合を保つ時代やタイプに区切られている。

機能主義的な見地からすれば，社会の統合は，規範を整備し，それ以外は規制することで「適法な」行動体系を形成する価値システムを通じて維持されていることになるし，また，マルクスは支配的な生産システムによってひとつの時代区分が維持されると考える。社会文化的な違いが根拠となって時代区分が成立するとするソローキンの場合も，感覚的ないし観念的な原理が社会を統合する。

8　日本のケーススタディ：閉じられていて比較的統合された社会から，ダイナミックで「近代化された」社会への変化をどのように説明したらよいのか。

1　特殊な役割を担った軍事—政治的エリート（西欧知識をいち早く吸収した層）による上からの社会改革

2　社会改革の正当性を保証し，神話的過去との連続性の保持および変動を是認するものとしての天皇制

3　教育勅語に象徴される，宗教と文化の，経済システムへの徴用

9　西欧的近代化：普遍的な価値観と使命。社会分化のプロセス。これに対し，対照的な日本の特殊で持続的な社会統合（村上泰亮の「イエ」テーゼ）。

10　交換の３つのタイプ

1　経済的交換：契約により媒介される

2　社会的交換：贈与と互酬性により媒介される

3　政治的交換：代表権の委託と請願，投票の役割

経済的交換は，ずっと西欧資本主義の際だった特徴であった。日本は社会的交換を制度化したという点でユニークである。

11　日本は西欧から技術と大衆文化を導入した（ただし，岩男教授によれば，ドラマ「ダラス」は日本では人気がなかった。日本の例外主義のユニークな例）。それでは，日本は西欧の近代化の道筋をそのまま踏襲するのだろうか。

12　領域間の断絶：社会は，「一群の変数の変化が他のすべてに，ある決まったやり方で影響を与えるような全体的・有機的システム」ではない。社会は３つの異

表 1:　現代社会の領域の断絶

領　域	中軸原理	中軸構造	中心的価値志向	個人の社会との関係	基本プロセス	構造的課題
技術-経済	機能合理性	官僚制	物質的成長	役割に分化する	専門化と代替	制度と個人の具体化
政　治	平　等	代議制	統治される側の合意による支配	決定への参加 個々人の富と幸福の追求の尊重	交渉と衝突 協　調	権利賦与 メリトクラシー 権力集中
文　化	自己実現	意味と人工物の創出	「新しさ」「独創性」の価値の重視	全人性の強調	ジャンルと差異の解体	天才の民主化 価値基準の危機

なった，しばしば自律的な領域から構成されている（しかし，強い宗教的影響の下などでは——初期の西欧カソリック文化，神政一致のイスラム社会またソヴィエトに代表される全体主義国家などでは——社会の各領域を一貫させようとする努力がなされている)。3つの領域とは，経済，政治そして文化である。

1　経済は，多かれ少なかれ，ひとつのシステムをなしている。これは，交換を通じての諸変数の相互依存性が強いためである。変化は交換に対して線型的であり，生産またはプロセスがより効率的であれば，あとはコストの問題であり，それに応じて使用される。

2　政治は権力や特権を求める争いを制御し，法を執行する「秩序」(強制によるものであれ，合意によるものであれ）である。

3　文化はその表出次元において一連のスタイル（古典・バロックなどの）であり，宗教的次元では一連の異なる世界観である。

過去の幾多の政治システムは崩壊してしまったし，経済システムも消滅した。しかし，仏教・神道・ヒンドゥー教・ユダヤ教・キリスト教・イスラム教など偉大な歴史的宗教は，その中核部分が認識できる程度には，生き残っている。そして，ギリシア演劇・ダンテの詩曲・源氏物語に代表される平安期の繊細さ・世阿弥の能等はみな，時を超えてその審美的・倫理的影響力を保持している。

しからば，時代はいかなる意味で明確に区切られて成立するのであろうか。さらに両倒なことに，各領域において軸となる原理はしばしば相互に矛盾する（表1参照)。例えば，経済システムにおける役割分業と機能合理性，文化領域での自己実現の志向，政治領域での平等主義が，現代社会において同時に推進されている。

13　西欧の社会理論は，歴史の終着点と普遍国家の発展を仮定している。これらの主要な特徴は，以下の3つである。

1　市場経済

2　政治的平等と民主的形式

3　個人主義と近代精神：伝統的価値観の拒否，性行動をはじめとする行動規範の自由な選択

14　しかし，これらが該当するのは欧米社会にとどまる。われわれは未だ「歴史の終焉」には立会っていないし，むしろ「歴史の復権」が目立つ。それは西欧の精神的危機を背景とした宗教の復古主義，民族的・原始的アイデンティティにみられる。また，シンガポール・インドネシア・マレーシアなどアジア諸国の，西欧流民主主義ではない，上からコントロールされた社会での経済発展も見られる。

15　もし21世紀が太平洋の世紀になるなら，中国の発展が重要な鍵になる。10億を超す人間が，共通のアイデンティティのもとに社会を構成することは，いかにして可能であろうか。マルクス主義は既に失敗した。まとめるに十分な力を持つ宗教は，存在しないように見える。社会をまとめあげるものとしては，明治期の日本に見られたと同様，ナショナリズムしか残されていないのだろうか。しかしナショナリズムは，民衆を動員するための「敵」を必要とする。誰に対して中国は立ち向かうのだろうか。

16　社会科学は，未来を予測するための「アルゴリズム」を持たない。一般社会学理論は，高度に抽象的すぎる。われわれにできることは，案内図としての歴史に立ち返り，その中で社会の特徴を把握することでしかない。

17　日本はいま変換期にある：金融システム・経済システムは問題を抱えている。政治秩序にも方向性が見えない。文化はさまざまなスタイルの混乱に向かってい

る。自国の国民や文化にプライドを持つためには，その実体的な裏付けと，それを伝統として保持する努力が必要である。しかし，近代化のプロセスは，ともすると伝統文化を浸食してしまう。日本はどのようにしてこれを解決するのか。

18　西欧社会理論の主軸は，社会が普遍性を志向して進化していくとの考え方である。たとえそれが達成し得ぬ幻想であっても，いくつかの利点は残る。普遍的価値観と人権の理想である。では人権とは何か。

人間はその尊厳を侵害されないという考え（拷問・レイプの撤廃）

社会における法の支配と市民権の観念

人間の尊厳と，見苦しくなく最低限以上のレベルの生活を維持できる手段が確保されること

他者の権利を尊重する感覚

生活に適合した環境（大気・水・空間）の創出

19　以上述べてきたことが示すことは，社会理論というものが，人間本性の探求や社会の研究から導かれる規範的・道徳的関心から独立ではない，ということだ。これは社会科学が未完のアートだとしても，そうあるべきものなのである。